

記述式入試 大学から懸念続出

「予測以外の解答 混乱する」 「基準均一化なら意味ない」

ひらく 日本の大学

朝日新聞・河合塾共同調査

受験者が50万人規模にのぼる大学入試の新共通テストに「記述式」は導入できるのか。朝日新聞と河合塾の共同調査「ひらく日本の大学」への各大学の回答をみると、新テストの目玉である記述式をどのように採点して評価するかや、採点にかかる教員の負担の問題も絡み、大学の懸念が色濃くにじむ。

▼1面参照

新共通テスト

化するほど記述解答である意味がなくなる」と指摘する。

記述の「量」も焦点だ。

正解があった場合、採点のやり直しなどの混乱が予想され、その場合時間的に間に合うのか」という懸念を示す。いずれにしても、採点する側の手間や負担は大きそうだ。

国学院大（東京都渋谷区）は12年ほど前まで、独自に記述式を採り入れていた。その経験から「実現は可能」とする。だが、その同大でさえ、「作問の負担、採点基準に基づく採点の適格性など課題は多いように思われる」と回答。共立女子大（東京都千代田区）も「予測された正解以外の

採点基準への不安もある。県立広島大（広島市）は「条件付き記述式を導入した場合、与えられたキーワードを用いることにより、定型的な解答のみが正解とされ、解答に至る自由な表現が制約される懸念がある」とみている。東京家政学院大（東京都千代田区）も「採点の基準を均一

化すると、記述式導入は、表現力や思考力は二の次になる。本当に思考力を評価するのなら少なくとも400字は必要であろう」と答えた。早稲田大（東京都新宿区）も記述式の導入は大きい必要とするが、短文には否定的だ。「思考力が著しく劣る者を排除することしかできないのではないか」と回答した。（片山健志）